

パラリンピックを通じて社会を変える

河合 純一

プロフィール
1975年静岡県生まれ。早稲田大学大学院修士。パラリンピック競泳金メダリスト。中学校教員を経て、現在、日本パラリンピアンズ協会会長、国立スポーツ科学センター先任研究員、2020東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会アスリート委員会副委員長など。自伝映画「夢追いかけて」が2003年に公開。著書に「パラリンピックを学ぶ」早稲田大学出版部など。

私は一九九二年のバルセロナから二〇一二年のロンドンまで六回のパラリンピックに競泳で出場してきた。視覚障害クラス(S11・全盲、光覚)で五〇メートル自由形での金メダルを含め、通算二一〇個のメダルを獲得することができた(金五個、銀九個、銅七個、日本人最多)。また、パラリンピアン仲間たちと二〇〇三年に日本パラリンピアンズ協会を立ち上げ、現在は会長をつとめている。こうした活動も考慮され二〇一六年に私はパラリンピック殿堂入りを果たすことができた。日本人として初である。これは改めて自分自身の活動を振り返るよい機会ともなった。

2020東京オリンピック・パラリンピックのビジョンは「スポーツには世界と未来を変える力がある。」である。そのために、全員が自己ベスト、多様性と調和、未来への継承という三つのコンセプトを掲げている。そして、史上最もイノベティブでポジティブな大会を作り出そうとしている。

開催まで二年、一〇〇〇日を切った。限られた時間である。私たちに何ができるのだろうか。

私はパラリンピックには社会を変える力があると信じている。それは選手として多くの大会に参加してきた実感でもある。世界で初めて、オリンピック・パラリンピックを二回開催することとなった東京である。この絶好の機会を生かし、世界のロールモデル

となるチャンスである。

二〇一二年のロンドンパラリンピックはもつとも成功した大会とされている。多くの国々がイギリス、ロンドンの取り組みを学んでいる。二〇二〇年以降は、その地位に東京、日本がつくチャンスである。

「社会を変える」と大きなことを言っていると思われるかもしれない。どうすれば社会が変わるのかといえば、社会を構成している人々の心構えや考え方を変えていくことに他ならない。一人から二人、二人から三人へと広がっていくことにより、ある閾値を突破することにより、社会が変わったといえるのだと考えている。そのために、私たちは子どもたちへの教育に大いなる可能性を見出している。パラリンピックで繰り広げられるパフォーマンスは人々に驚きや感動をもたらす。その衝撃が新たな気づきとなり、変化を促す。パラリンピックとはそういったコンテンツなのだと思う。

しかしながら、オリンピックの参加国数は二〇〇をを超えるが、パラリンピックは一六〇ほどである。この差を生み出している社会背景から、目をそらすことなく、受け止めていかねばならない。あらゆる角度からパラリンピックを見てほしい。そして、全身で感じてほしい。二〇二〇年八月二十五日〜九月六日までを楽しみにしていただきたい。

月刊 みんなぱく

4月号目次

- | | |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
パラリンピックを通じて社会を変える
河合 純一</p> <p>2 特集 障害で気づく、障害が築く
梅棹忠夫『夜はまだあけぬか』を読み直す
——障害研究と文化相対主義
広瀬 浩二郎</p> <p>4 「国文祭・障文祭なら2017」の開催と
体感展示の意義／大塚 高史</p> <p>5 障害者アートと2020年／真下 弥生</p> <p>6 娯楽のユニバーサル化——映画の副音声／大石 徹</p> <p>7 視覚障害者を屋外へ
——観光のユニバーサル化を目指す研究／山本 清龍</p> <p>8 障害学生支援に向けた広島大学の挑戦
佐野(藤田) 真理子</p> <p>9 大学教育と学問の再検討・再創造／嶺重 慎</p> | <p>10 〇〇してみました世界のフィールド
フランスとマヌーシュ、
ふたつの現場での子育て
左地 亮子</p> <p>12 みんなぱく Information</p> <p>14 想像界の生物相
天狗の鼻
久留島 元</p> <p>16 新世紀ミュージアム
ネパール音楽博物館
寺田 吉孝</p> <p>18 シネ倶楽部 M
単調な構図が生む豊潤な沃野
——「マナカマナ——雲上の巡礼」
南 真木人</p> <p>20 ながなんちゃ
祖母はよそ者?
河合 洋尚</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|